

『行人』再論

佐藤裕子

一

作品『行人』は大正元年十二月六日から大正二年四月七日まで、東西両「朝日新聞」に掲載される。その後五ヵ月の中断をはさみ、「塵勞」が再び同紙に掲載されるのが同年九月十六日から十一月十五日までのことである。この中断と書き継がれた「塵勞」をめぐって、「その間に作者の問題意識が移行した」⁽¹⁾という予測のもとに、作品構成の破綻、主題の分裂が論じられてきたことは周知のところであろう。ことに、昭和四十年以降相次いで発表された『行人』論の趨勢を見る時、「塵勞」の章執筆の必然性をめぐって、「塵勞」以前と以後とは作品が全く分裂するという論⁽²⁾と、分裂を認めながらもそれ以上に「塵勞」執筆の必然性を認める論⁽³⁾の二つの系譜に分けることが出来るのであるが、そのいずれの場合においても、胃潰瘍

再発による中断という事実を、執筆時の作者の心情を生々しく伝える当時の書簡等⁽⁴⁾の作品外の出来事を援用して跡付けた後、「塵勞」の章が作者の本来の意図に反して「書き加えられたもの」であるという見通しに立った上で論じられていることには充分留意されねばならない。それはまた、前三章をどのように読むかという態度にも関わって、「二郎説話」を生む契機ともなるのであるが、いずれにしてもまず「書き足された」「塵勞」という前提から自由になることが肝要であろう。

例えば、「塵勞」に描かれた一郎の苦悩が、「作品全体の中に十分有機的にくみこまれていない」と指摘する論も⁽⁵⁾、まず「有機的にくみこまれる」べきはずの一郎の苦悩というものをあらかじめ予想した上で、四つの章の連なりの有効性を否定し、構成の破綻・主題の分裂を論ずるのであるが、事情は逆で、「有機的にくみこまれて」

いるとは到底思えないような苦惱こそが『行人』に描かれているということなのだ。

駒尺喜美氏はかつて「構成上の破綻とみえるものは、おそらく作者の追求しているもののむずかしさ、解きがたさに由来している」と指摘されたが、まさに破綻あるいは分裂と見まがうようなものが作品の中に存在し、そしてそれこそが『行人』の主題であることが、従来の『行人』論の中では見過ごされてきたように思われる。

またしばしば指摘されてきた、構成の破綻の主な原因とされる『塵勞』五十二章中二十四章を占める「Hさんの手紙」についても、『テクスト内的読者』ともいえる視点人物⁽⁸⁾「二郎」によってまず事柄、そのものの全容が語られ、次に語り手が交替して、その事柄の意味をHさんが説明するという構図は、『行人』固有のものではなく、前作『彼岸過迄』から引き継がれてきた手法である。また、ある「不特定の時」から改めてすべてを語りおこすという回想形式は、次作『ころ』に引き継がれることとなるのであるが、いずれにしても『彼岸過迄』の「雨の降る日」「須永の話」「松本の話」と、『行人』『ころ』の回想形式に共通するのは、「語り手」が「語る対象となる人物」と共に同じ時を過ごしながら、ついにはその「淋しさ」を共有することが出来なかった深い悔恨の内に物語を語り始めるところにある。

「整った頭、取りも直さず亂れた心」「信用は出来る、然し信用は出来ない」(『塵勞』四十二) という矛盾相反する、不条理な表現によってしか描けないような人間の苦悩の様相、あるいは人間なるものの根源的な暗さをこそ描いているということである。

少なくとも今現在ある形での『行人』に描かれた一郎と二郎とお直と、彼らを取り巻く様々な人間たち、その構図の中で作品の本質と主題をとらえた上で『行人』は論じられるべきだという初心を、こと『行人』にあつてはたえず確かめつつ考察を試みるべきであろう。

(1) 伊豆利彦『『行人』論の前提』『日本文学』一九六九年三月

(2) 『塵勞』以前と以後とは作品が全く分裂しているとする論の系譜は次の通りである。江藤淳氏『決定版・夏目漱石』新潮社・一九七四年十一月、橋本佳氏『『行人』について』『国語と国文学』一九六七年七月、宮井一郎氏『我執三部作——二『行人』』『漱石の世界』講談社・一九六七年、伊豆利彦氏『『行人』論の前提』前掲書。

(3) 分裂を認めながらもそれ以上に『塵勞』執筆の必然性を認める論は次のものがある。小泉浩一郎氏『『行人』論』『言語と文学』五十八・一九六八年五月、楠谷秀昭氏『夏目漱石論』河出書房新社・一九七二年七月、安藤章二氏『『行人』の世界——その挫折の意味——』『人文論究』三十三・一九七七年三月)らの系譜である。

(4) 書簡に関しては古川久氏の『漱石の書簡』(東京堂出版)があり、『行人』の項目の中で、この間の事情にふれておられる。例えば、大正元年十二月一日中村翁宛書簡、同年十二月二日津田青楓宛書簡、十

二月四日松根東洋城宛書簡が挙げられる。

(5) 橋本佳氏は、『行人』について「(前掲書)において、『直は御前に惚れてるんぢやないか』という一郎の言葉に注目し、この一郎の言葉が「神経病患者的妄想」であるという読者の先入観から離れて、『もう少し違った見方が出来ないであろうか。』という疑義を呈せられた上で、『二郎と直の関係』の重要性を説いておられる。

(6) 伊豆利彦『行人』論の前提「前掲書

(7) 駒尺喜美『漱石その自己本位と連帯と』八木書店・一九七〇年五月

(8) 小森陽一『構造としての語り』新陽社・一九八八年四月三〇日

(9) 拙稿『彼岸過迄』論——苦悩の果てに立ち現れてくるもの——」

フェリス女学院大学文学部紀要第二十八号・一九九三年三月

二

『行人』は、「蒼い色」(「友達」三十三・以下この節の引用は特記のない限り「友達」の章からのものである)の皮膚と、「黒い大きな眸」(同)を持った「狂気の娘」をめぐる三沢と二郎、そして一郎の物語である。少なくとも、この作品の主題の核心であるこの「娘」の言動について、三人の男たちのそれぞれの見解が示され、とりわけ一郎においてはその見解に端を発して、その苦悩の全貌が露にされるという構成をとる。片岡良一は『「友達」を読むことによつて、作者が何を書こうと予定しているのかを、おおよそには推定することが出来る』と、「友達」の章の意義を認めるのであるが、作者は作中人物の中心的存在である一郎を、この章に現実には登場

させないという構成の中で、まず二人の男たちが一人の女性を、そしてやがて現れる一人もまた一人の女性を、その存在の深みにおいてどのように受けとめ、関わってゆくかをこの「狂気の娘」の挿話を作品の主題の核心に据えることによって描いてゆくのである。

作品は、「母から依託された用向」(一)を携えた二郎が、梅田の停車場に降り立ったところから始められる。二郎はまず岡田の家へと向かう。それは、お貞さんの夫となる佐野と会見し、その結果を東京の母の許に報告するという「實際的な用件」(同)を果たすための訪問であると同時に、岡田の家が大阪で落ち合い高野登りをやるという約束をした「友達」との連絡場所でもあったからである。

そしてまず岡田が、次にその妻であるお兼が登場する。不満といえは唯一子供が出来ないことだけという、平凡で幸せな岡田夫婦の姿がこうして我々の眼前に提示される。それは後に登場する一郎、お直夫婦の有り様をきわだたせるための一つの布石となるものでもあるが、何よりもまずここでは「友達」全三十三章の内十二章を費やして、岡田とお兼夫婦の日常を、迂遠ともとれるような精密さをもって詳細に描き出すのである。しかも、この岡田夫婦の穏やかで幸福そうな外見の中に、微妙な翳をしのびこませるのだ。例えば二郎が久しぶりに会うことになる岡田のことを考えた時、まず「強く酒^{ヰル}精に染められた彼の四角な顔」(一)という連想をするのであるが、

「後引上戸」(四)、「吐いたり管を捲いたり」(九)、「御酒を召し上がらない方は一生のお得ですね」(十二)というお兼の言葉や、あるいは「赤い顔」(同)をして二郎に相撲を取ろうと「野蠻な聲」(同)を出す夫に「眉をひそめ」(同)つつ「嬉しさうな眼付」(同)をするその態度から、酒を好む夫に対するお兼の複雑な思いが見え隠れしていることは否めない。また、子供について「妻たるものが子供を生まなくつちや、丸で一人前の資格がない様な氣がして……」(四)という岡田の言葉と、「兄弟の多い家に生まれて大變苦勞して育つた所為か、子供程親を意地見るものはない」(六)と考えるお兼の間にはもはや共通の認識はない。まさにここにおいて、岡田夫婦が一郎、お直夫婦と対照的な存在などではなく、明らかに同質的存在であることが確かめられよう。

そして三澤が登場する。生来胃弱であつた三澤が大阪到着の後、二日程寝込んで入院したという知らせが岡田の家に届く。その病院で二郎は「偶然あの女を見出す」(十六)のであるが、「あの女」と三澤は同じ胃を病み、しかも二郎の知らない浅からぬ関わりが三澤と「あの女」の間に存在することが分かる。そして思いがけぬ三澤の告白によつて、「あの女」への思いの奥に、「蒼い色」(三十三)の皮膚と「黒い大きな眸」(同)を持った「狂氣の娘」の存在を二郎は知ることになるのだが、ここでも事情は同様で外觀を詳細に描

きつつ、その存在の意味するところをおぼろげに示しているにすぎず、肝心の「狂氣の娘」をめぐる挿話が語られるのは、「友達」最終部三十二、三十三章においてであり、それまではひたすらその面差しが「好く似て居る」(三十三)という「あの女」の話、しかも病院の廊下で「横顔を見た限」(十九)一度も姿を見せない「あの女」の話に終始するのである。

三澤は言う。

僕は其度に娘さんから、斯うして生きてゐてもたつた一人で淋しくつて堪らないから、何うぞ助けて下さいと袖に縋られるやうに感じた。——その眼がだよ。其黒い大きな眸が僕にさう

訴へるのだよ。」(三十三)

「病人の事だから戀愛なんだか病氣なんだか、誰にも解る筈がないさ」(同)としながらも、「僕は病氣でも何でも構はないから、其娘さんに思はれたいのだ。少くとも僕の方ではさう解釋してゐたいのだ」(同)という一つの愛の形が示される。病氣が悪くなればなる程「その娘を「氣に入るやうになつた」(同)と語る時、三澤は確かにこの娘を愛するのであるが、同時にこの娘の三澤に対する言動がそのまま自分に向けられたものであるとは信じてはいない。不幸な結婚の末に夫に対して言いたかつたことを三澤に言うようになつたというのが事実であるけれど、そのように考えたくはない、心か

ら自分に対して発せられた言葉であると信じたいと三澤は語るのである。錯乱した精神の世界の中で語られることに殆ど意味を見い出せなかった時代⁽²⁾において、あるいは人間がその意味に未だ気づいていなかった時代において、漱石は心を病んだ人間の深みに分け入って、その中にこそ意味を見いだす男の愛を描いた。それはつまり、時代に先駆けてそのような精神の有り様を孤独な心の中に見出したということであるが、しかもそればかりではなく、既製の概念とか、社会の道徳であるとか、あらゆる觀念に囚われることなく、徹底して人間の真実を見つめようとする視点がここに確立されるのである。人間的なものそのものと、真に病的なものとの区別はいうまでもないが、理解を越えた人間の異常な言動のもつ意味を、苦しみ悩む魂の叫びとして捉え、そのこととどのように関わってゆくのかということなのである。繰り返すが、ここにおいて肝心なのは、病気が悪くなればなるほど、その娘さんを気に入ろうになったと語り、その傷ついた魂と全的に関わろうとした三澤の心情であらう。「自分は黙然とした」(同)と二郎は語る。人間の精神の深い痛みと向き合って立ち竦まざるを得ない二郎の姿がここにある。

漱石は、この気の違ったしかも出戻りという、作品が執筆された当時において女性としては最悪の、きわめて大胆で悲惨な状況を設定し、その異常さにも拘わらず、この「狂気の娘」の言動の持つ意

味を受け止めて、深い慰めを得た三澤を描いた。ここで「友達」の章は終わり、次にこの「娘」の狂気の中に、「實際」的(「兄」十一)な心情を見出し、そこに意味を読み取ろうとする一郎が登場することとなる。まさにそれこそが、『行人』の主題の中心をなすものであるからだ。

(1) 片岡良一「『行人』と『こゝろ』の実験」『夏目漱石の作品』厚文社一九五五年八月

(2) 例えばフロイドの『夢判断』は一八九九年十一月に出版されているが、この夢の解釈の技法を精神病理学に応用したのがユングで、一九〇六年のことであった。このユングが『心理学的了解について』を発表したのが、フロイドと訣別して後の一九一四年にかけてのことである。

三

そして一郎とお直が登場する。二郎は三澤を見送った翌日、今度は「母と兄夫婦を迎へるため」に梅田の停車場へと向かう。(「語り手」の二郎は、母と兄夫婦を交えたこの旅中の出来事を人々の表情や会話と共に詳細に語りつつ、同時にその時々を得た自らの感慨をも差し挟みながら、物語を進めてゆく。そもそも、この旅の組合わせからしてが「妙」(「兄」五・以下この節の引用は特記のない限り「兄」の章からのものである)であったと二郎は語る。

——お貞さんの結婚問題が目的なら、當人の病氣が癒るのを待つて、母なり父なりが連れて來て、早く事を片付けてしまふとか、自然の豫定は二通りも三通りもあつた。それが斯う變な形になつて現れたのは何ういふ譯だか、自分には始から呑み込めなかつた。母は又それを胸の中に疊込んでゐるといふ風に見えた。母ばかりではない。兄夫婦も其處に氣が付いてゐるらしいかつた。(五)

ここで二郎は、この旅には母がその胸中に秘めるもう一つの目的が存在すること、その目的に兄夫婦も氣づいてゐること、そしてその内容が二郎には(つまりそれは読者にも)明らかにされてゐないことを語っている。このように、まず旅そのものにどこかしら不安の影を忍び込ませ、さらに屈託なく取り交わされる会話の後に付け加えられる二郎の〈語り〉によつて、あるいは二郎の〈語り〉を越えて息づく登場人物たちの言動によつて、彼らが何に悩むかを徐々に浮かび上がらせてゆくのである。

ともあれ宿に到着した一行は、母も一郎も、また二郎が「無口な性質」(四)と語るお直ですらも、皆明るく屈託がない。とりわけお直は、お貞さんの病状を二郎に説明する口振りも、あるいは岡田が用意してきた絵端書に寄せ書きをして東京に出す段で、岡田が「叔父さんは風流人だから歌が好いでせう」(二)と勧められた時、

「歌なんぞ出来るもんですか」(同)と答える場面にしても、また一郎が「昔泊まつたという宿屋の夜の景色」(三)の話をした折りに、「一體それは大阪の何處なの」「何處だか解らなくちや詰まらないわね」(同)と語るこれらの言葉を考えた時、いわゆる「無口」という言葉から連想されるイメージとは別の姿がそこに浮かんでくる。また、大阪を出発する前日岡田を交えて食事をした際に、いつまでも飲んで帰らぬ岡田の前で、お直は「團扇を顔へ當てて欠を隠」(九)すというような遠慮のない行動を取つたりもする。

また紀三井寺へ姑と見物に行つた時には、高い石段を前に躊躇する姑の手を引いて登るという優しさも見せるし、その一方で舅の謡の会では、客人の前で一郎の言葉に対して「妙な御話ね。妾女だからそんな六づかしい理窟は知らないけれども、始めて伺つたわ。随分面白い事があるのね。」「歸つてから」十九)という皮肉を言つてのけさえるのである。この率直な物言いがお直に対して向けられた時、「若い女同士の葛藤」(「歸つてから」七)となるのである。

いずれにしても、お直は二郎のみならず、一郎をも含めた作中登場する誰彼に対して、遠慮のない言動を取る人物として、まず登場していることには充分留意されるべきであろう。

淋しい片髻を浮かべ「妾は何うでも構ひません」(十六)と答え

る姿の対極に位置するとも見える、決して「無口」とは言えないこれらのお直の言動は見過ごされるべきではない。これこそがまさに、「淋しい色澤の類」(六)と「淋しい片鱗」(同)と共に二郎が見た、お直の「何物にも拘泥しない天眞の發現」(「塵勞」六)としての言動なのである。

一方一郎もまた、お直が登場した同じ場面において、岡田に向かって「將棋の駒がまだ崇つてると見えるね」(二)と笑いながら冗談を言う人物として我々読者の前に姿を現す。例えば、母と二緒にお兼さんを評し合う場面や、かつて旅した大阪の宿屋の夜の光景を話す場面など、ごく普通の「穩やかな人物」(六)としての一郎の様子をまず提示した上で、一郎の気難しさや我儘が何に由来するのかが語られるのである。

たとえどれほど機嫌が悪くても、「他人の前へ出ると、また全く人間が變つた様に、大抵な事があつても滅多に紳士の態度を崩さない」(六)という二郎の言葉を裏付けるかのように、一郎は岡田夫婦と別れ、舞台が大阪から和歌山に移った頃から自らの不快を隠すことをしなくなる。二郎が三澤の「狂氣の娘」の話を持ち出したのは、まさにこのような時においてであつた。二郎は一郎がこの「狂氣の娘」の話を既に知っていたことで驚くが、さらに「意外」(十一)だったのは、一郎が再びこの「狂氣の娘」を話題にしたことで

ある。前章「友達」においては、三澤と共に向き合うこととなつた「狂氣の娘」の言動に、今度は兄一郎と共に、面と向かうことを余儀なくされるのである。この「狂氣の娘」の言動についての一郎の見解は、次のようなものであつた。

「己は何うしても其女が三澤に氣があつたのだとしか思はれんがね」

「――凡て世間並の責任は其女の頭の中から消えて無くなつて仕舞ふに違なからう。消えて無くなれば、胸に浮かんた事なら何でも構はず露骨に云へるだらう。さうすると、其女の三澤に云つた言葉は、普通我々が口にする好い加減な挨拶よりも遙に誠の籠つたものぢやなからうか」(十三)

この一郎の言葉に対して、二郎が示すのはただ「面白」(十二)という関心であつた。「面白い」としか言い得ない二郎に対して、一郎は初めからこの「狂氣の娘」の言動が、他を憚ることのない一切の(技巧)を排した素直な感情の発露として、真実のものと考えるのである。そしてそれは、「噫々女も氣狂にして見なくちや、本體は到底解らないのかな」(十二)といううめきに重なり、ついにはお直の「節操を試す」(二十四)という理不尽な試みを、虚しいと知りつつも二郎に依頼するという悲痛な事態を引き起こすところまで、追い詰められてゆく。その時二郎は「只あつけに取られて、呆

然としてゐた。」(同)という。「兄夫婦の間柄は母が自分に訴えた通り、自分にも大低は呑み込めてゐた」(十八)はずであるのに、ここでの一郎の言動を二郎は理解することが出来ずに、ただ立ち竦むのみである。「友達」の章において、「狂気の娘」を愛し得た三澤に対して、やはり「黙然」(「友達」三十三)として立ち竦む二郎が描かれるが、ここでも事情は同様で、二郎は理解を越えた深く暗い渦の中に巻き込まれてゆく。

ともあれ、娘の「狂気」を理解し、その上で彼女の孤独な魂と全的に関わろうとした三澤と、「狂気」であるが故に、その言動が「世間の手前とか義理」「世間並の責任」(十三)にまどわされることのない純粹な心情であると考える一郎との間には測り知れない距離がある。この決定的な差異の故に、一郎はかくまでに苦しみぬくのであろう。

そして再びお直が登場する。一郎の懇願を容れて、お直と和歌の浦へ出掛けた二郎は、さらに不可解なお直の言動に翻弄されることとなる。確かにこの和歌の浦での一夜には、多くの解釈を許すようなお直の不可解な行動や状況が描かれているのであるが、そのいずれもが明らかに一郎の存在、あるいは一郎との不和を前提として、極めて意識的に二郎に対して行われたものであることは疑いも無い。何故なら、先述したようにお直はこの旅が企画された時から、旅に

課せられた自分たち夫婦の不和に根差すもう一つの目的に気づいている。そして、夫一郎が同行しないこの和歌の浦行き目的にも気づいているからこそ、二郎に語ることが必ず一郎に伝えられるであろうことを予測した上で、自分が「魂の抜殻」(三十一)であることと、「いつでも死ぬ覚悟ができていること」(同)を語るのである。さらに言うならば、お直にとつては、これらの言葉がたとえ一郎に伝えられなかったとしても同じことである。すなわち、一郎に対して意識的に「無口」になることこそが、夫に疑われた「妻の悲しみと絶望の表現」⁽³⁾であり、「魂の抜殻」であることの証明となるからだ。

- (1) 高本文雄『新版 漱石の道程』審美社・一九七二年三月二十五日
- (2) 秋山公男『漱石文学論考』桜楓社・一九八七年十一月
- (3) 安藤璋二『「行人」の世界——その挫折の意味——』『人文論究』北海道教育大学函館人文学会・一九七三年三月

四

かくして、「一日一晚嫂と暮らし」(同四十三)で、二郎は次のような見解に至る。

云ふべき言葉は澤山あつたけれども、夫を一々兄の前に並べるのは到底自分の勇氣では出来なかつた。よし並べたつて最後

の一句は正體が知れないといふ簡単な事實に歸する丈であつた。或は兄自身も自分と同じく、此正體を見届ようと煩悶し抜いた結果、斯んな事になつたのではなからうか。自分は自分が若し兄と同じ運命に遭遇したら、或は兄以上に神經を悩ましはしないかと思つて、始めて恐ろしい心持ちがした。(同三十九)

この時点で、二郎は安藤璋^{〔一〕}氏の述べられるように、「兄の孤独な世界の証言者の位置に立」っている。ところが、「嫂の正體が全く解らないうちに」(同)宿に戻つた二郎は、嫂と同様の「兄を裏から甘く見る」「遣口」(同四十三)を自らの内に発見することとなるのだ。確かに二郎は結婚する以前のお直を知っていた。そうしてそのことによつて、二郎に対しては氣安く振舞うお直との關係を妹のお重に「當て擦」「歸つてから」九・以下この節の引用は特記のない限り「歸つてから」の章からのものである。られ、少なからず父母をも心配させている。また三澤からは「君がお直さん杯の傍に長く喰付いてゐるから悪いんだ」(二十三)と指摘され、自分が兄夫婦の不仲の原因に目されていることを不意ながら自覺している。しかし、一郎がパオロとフランチェスカの故事を引いて二郎を永遠の勝利者に準えるに及んで、二郎はいよいよ「兄の精神状態を其處に導いた原因として、何うしても自分が責任者と目指されてゐるといふ事實」(二十八)に直面せざるを得なくなるのだ。

實際二郎は、お直の華奢な「手爪先」と「淋しい片脣」にひかれ、一郎の前では見ることの出来ないお直の一面を知り、あるいはそのような時を共有するに喜びを感じたり、愉快と感じたりしているのだが、逆にそのような時を共有するに従つてお直の存在が一層不確かなものとなり、二郎の心から確かめようもない遙かな暗がりの中に消え去つてゆく。

和歌の浦での一夜の後、宿に戻つたお直が「針鼠の様に尖つてゐる」(一)一郎を「僅かの中に丸め込んだ」(同)その口を目の当たりにして、ついにはお直を「青大將」(一)に準えるに至る。二郎は次のように考える。

自分は暗い中を走る汽車の響のうちに自分の下にゐる嫂を何しても忘れる事が出来なかつた。彼女の事を考へると愉快であつた。同時に不愉快であつた。何だか柔かい青大將に身體を絡れるやうな心持もした。兄は谷一つ隔てゝ向ふに寐てゐた。是は身體が寐てゐるよりも本當に精神が寐てゐるやうに思われた。さうして其寐てゐる精神をぐにや／＼した例の青大將が筋違に頭から足の先迄巻き詰めてゐる如く感じた。夫からその巻やうが緩くなつたり、緊くなつたりした。兄の顔色は青大將の熱度の變ずる度に、それから其の絡みつく強さの變ずる度に、變つた。

ここで、青大将に譬えられたお直に絡み付かれているのは二郎ならぬ一郎であることを忘れてはならない。一郎もまた全てを知っているのだ。一郎は幾度かお直の「靈妙な手腕」(一)によって「氣分を柔らげ」られてきているのである。つまり二郎が見たお直の様々な姿を一郎も知っているということである。そしてその「靈妙な手腕」を「技巧」(作為)と知りつつも慰められるであらう自身自身を、またそういう手段を用いるであらうお直の心も、そうして一時は慰められてもそれだけでは決して満たされない自分自身の心を知っていて、だからこそその故に一郎は苦悩するのであらう。

一郎の悲劇は、最も親しかるべき筈の妻の魂をつかみたいという願望に端を発するものであるのだが、それはつまり一郎が、自らの人生を生きていく過程において決定的な関わりをもつ存在として、妻(女性)を捉えているということの意味する。例えば、岡田とお兼夫婦のように、互いに別々のことを考えながら、なお穏やかに睦まじく暮らすことも可能であるのに、一郎は全身全霊をかけて自分と向き合うことをお直に要求する。愛する女性と全的に関わりとうとするこの態度は、当時の結婚観からすると、女性を対等な他者としてとらえる画期的な視点である。しかしその一方で、過度に鋭敏な精神と優れた知性の持ち主である一郎が、お直に自己の存在の全てを理解してほしいと希求する時、一郎は寸毫の偽りも「技巧」をも

許さず、かかる一郎の存在自身が、自己の心もお直の心も抜き差しならぬ破壊にまで追い詰めることとなるのだ。まさに、人間のエゴイズムの究極の相が、〈愛する〉という至高の行為のただ中に、矛盾背反しつつ現れるということであらう。

東京に戻った一郎は益々家族から孤立し、「書齋へ引籠」りがちとなる。これ以降一郎は、父の謠の会と、パオロとフランチェスカの話を二郎に聞かせる場面と、お貞さんの結婚式に登場したきり、姿を見せなくなる。それは、二郎が「歸つてから」二十九章において家を出たことによって、物語の〈視点人物〉であり、また〈語り手〉としての機能を果たせなくなつたことにも起因するのであるが、この「語り手が遠ざかる」という書き方について森嶋邦彦氏は次のように述べられる。

一郎に起こりつつある何事か、その実態から遠く、間接的にみるところに醸成される不穏な緊張感は注視されてよい。作者は次作『こゝろ』中「両親と私」で、この語り手が遠ざかるという書き方を踏襲しつつ、より動的に手法化する。——『行人』にあつて「歸つてから」のこの時間こそ主人公に何事かが起こり、最終段階へと急転する時間でもある。

とするならば、『こゝろ』最終章において、「先生」自らが〈語り手〉となつてその生涯の意味を「私」に語つたように、まさに『行

人』最終章において〈語り手〉が交替した上で、一郎の苦悩の意味が語られるという物語の構造は、必然のものであると言つていいだろう。この意味においても「塵勞」の章は〈書き加えられたもの〉などではないことが、明らかとなる。

一方、二郎が家を出て、とりあえずは一郎の苦悩の直接の原因が取り除かれたはずであるのに、一郎の言動はいよいよ常軌を逸したものとなり、家族の者もすでに問題が「兄に對する嫂の仕打」（「歸つてから」十二）に止まるものではないことを自覺している。

このようにして、続く「塵勞」の章において、三澤の「狂女の話」に端を発して明らかにされた妻お直の（あるいは「愛する人の」と言い換えてもよい）魂をつかみうるのかという一郎の苦悩が、さらに本質的なものに深化した形で語られることとなる。

- (1) 安藤璋二『「行人」の世界——その挫折の意味——』前掲書
 (2) 森嶋邦彦『「行人」再論』『日本文学研究』四十一巻三・四合併号、一九九〇年一月

五

つまり一郎の苦悩は、お直という一人の女性の個性によって引き起こされるものであると同時に、お直という女性の個性の如何を問わずに現れてくる問題でもあるということだ。

「塵勞」の章後半で語られる一郎の苦悩が、一見してお直から離れるように見えるのも、まさにこの故である。

そもそも、妻の節操を試すという理不尽な試みを二郎に依頼することになるのは、一郎が自分の妻の心をつかまえていないと自覺したことによる。しかもそれは、「他の心なんて、いくら學問をしたつて、研究をしたつて、解りつこない」（「兄」二十一）と二郎に指摘されるまでもなく、一郎にも充分過ぎるほど理解していることであったのが、それにもかかわらず「何うか己を信じられる様にして呉れ」（同）願ったことが発端となっている。この悲痛な叫びが、さらに「歸つてから」五章において、「己は自分の子供を綾成す事が出来ないばかりぢやない。自分の父や母でさえ綾成す技巧を持ってる。それ所か肝心のわが妻さへ何したら綾成せるか未だに分別が付かないんだ。（中略）二郎、ある技巧は、人生を幸福にする爲に、何しなくても必要と見えるね」という新たな認識へと変化してゆくのである。つまりここにおいて、信じられない原因を、外にはなく、自らの内に見い出しているということなのだ。一郎の不安と恐れの本根にあるのは、「自分のしてゐる事が目的」（「塵勞」三十一）にも「方便」（同）にもなっていないことを知りつつも、立ち止まることを許さず、走り続けることを要請する時代精神の分裂にあるといえる。さらに言うならば、近代という時代の要請を大真面

目に受け止めようとした純粹な精神の苦悩であるとも言えよう。その中から「何處迄行つても休ませて呉れない。何處迄伴れて行かれるかからない。」(同三十二)という苦渋にみちた人間存在の根源的な問いかけが現れてくるのである。そして、かつて彼が関心を抱いたすべての知識、あるいは「禪」や「道」や「キリスト教」や、すべて人間存在を救済する実在への憧憬が、救いがたき焦燥のただ中で語られることとなるのだ。この時「神」が現れてくる。しかし、この救済としての「神」も遠ざけられ、一郎は救済としての「絶體の境地」(同四十五)を認めるのであるが、その境地を認識すればするほど、その「絶體」から離れてしまう自分に一郎は気づく。つまり、「神」は信じられないし、さりとて自分自身による救済もありえないことを知るのである。徹底的な自己吟味の果てに「僕は矛盾なのだ。」(同四十五)という結論を導きだした一郎は、またさらに「何な人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。さういふ僕が既に僕の妻を何の位悪くしたか分らない。自分が悪くした妻から、幸福を求めるのは押が強過ぎるぢやないか。幸福は嫁に行つて天真を損はれた女からは要求出来るものぢやないよ。」(同五十一)との認識に至る。一郎が「偽りの器」(同三十七)と憎み、嫌悪する人々と自分はさして変わらないという視点である。『こゝろ』において「自分もあの叔父と同じ人間だ」(下「先

生と遺書」五十二)と意識した「先生」の姿が想起される箇所であるが、この視点はさらに『道草』へと引き継がれてゆくこととなる。「重荷を預かつて貰ふ神」(「塵勞」五十)を痛切に希求しながらも、その「神」を信ずることが出来ずに苦悩する一郎の姿を、Hさん是一郎との間で交わされた会話も交えて克明に記す。そればかりではなく、これら一郎の語る不安の内実と、「絶體の境地」の孕む矛盾をも指摘する時、Hさんは作品内部で起こった事柄の意味を語る(語り手)としての機能のみならず、一郎を相対化する機能を担わされていることが分かる。

一郎が救済されるかどうか明らかにされることなく作品は幕を閉じるが、お直の問題から離れたかの如き様相を呈するこの一郎の苦悩が、実は「お直をめぐる一郎の認識」の転換によるものであることがここで明らかとなる。この苦悩の構図によつてのみ、作品『行人』の世界が開示されるのである。

(一) 佐藤泰正『夏目漱石論』前掲書

※引用はすべて岩波書店漱石全集菊判からのものである。

※本稿は一九八五年七月に発表した「夏目漱石『行人』の世界」(『日本文芸研究』第三十七卷第二号)の原稿をもとに、大幅に加筆したものである。

(本学助教授)